



読書のすすめ

部長代理 勝木 茂

今年の10月は雨の日が多く、子どもたちは、屋内で過ごすことが多かったようです。それでも台風一過の翌日、初等部グラウンドは子どもたちの歓声であふれていました。

本来ならば、さわやかな秋晴れのもと、グラウンドで思いっきり遊ばせてあげたいなど感じていたのはわたしだけではなかったはずです。

さて、秋は屋外での遊びだけではなくいろいろな楽しみ方があります。「〇〇の秋」というのはたくさんあるようで「読書の秋」もそのひとつです。

「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行されずいぶんとなりますが、その基本理念は「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならないこと」となっています。(法第2条関係：引用)

初等部の図書館には約33,000冊の蔵書があり、司書教諭を中心とした「読書指導」が日々行われています。また、1年生から6年生が最大16時まで利用できる「放課後図書館開放」も行っています。

蔵書数や施設環境は十分に整っていると思います。あとは、いかに子どもたちが自主的に読書活動に向かうかということです。そのためには、「本を読むことは楽しい」「本を読みたい」と思える子どもに育てることが大切です。本年度4月から10月25日までの期間、初等部の子どもたちが借りた本の冊数は、8,285冊、図書館のべ利用人数は、11,791人（放課後、夏休みの開放を含む）となっています。図書担当の先生の話では、休み時間に読書する子や本を借りる子が増え、子どもたちの読書への関心はますます高まってきているとのことでした。

わたしは、小学生の頃、それほど読書をしたほうではありませんでした。どちらかと言うと漫画の本やTVアニメを見ることの方が多かったと思います。それでも印象に残っている本が何冊かあります。



かぜをひいて何日か学校を休んだ時などに読んだと記憶していますが、「十五少年漂流記」や「風の又三郎」、「ベニスの商人」は今でもよく覚えています。「十五少年漂流記」は冒険小説の代表格で今でも結構読まれているのではないのでしょうか。大人になってから一度読み返したこともありましたが、何といても無人島に漂流した少年たちの日々の出来事が、あたかも自分もいっしょにいるような錯覚をさせてくれ、ワクワクドキドキが今でも脳裏に残っているようです。「風の又三郎」は、「どっどど どどうど どどうど どどう」というフレーズが、まさに風を感じさせてくれて、本を読んでいるのにどうして風を感じるのだろうかと思ったものです。「ベニスの商人」は、その話の展開と結末のおもしろさが忘れられなく、わたしは学級担任だった時、学級の子どもたちと一緒にビデオ演劇として制作したこともあります。

保護者の皆様の中にも、子どもの頃に読まれた思い出の本がお有りではないでしょうか。たまには、お子さんと本の話などされるのもよいと思います。お子さんに本を読んであげたり、同じ本を読んだり、自分の思い出の本を紹介してあげたり、方法はいくつもあると思います。